

残虐行為はどのような人が行うのか？

-アウシュヴィッツでの暴力に関するインターネット上のアンケート調査-

相澤 優美

1. 序論

本研究の目的は、次の3つの問いを探索することにある。問1) 日本において、アウシュヴィッツでどのような行為が行われていたか、どの程度認識されているのか。問2) アウシュヴィッツで行われていた残虐行為を自分がする可能性があるか、どの程度の人が考えているか。問3) 日本でアウシュヴィッツのような出来事が起こると、どの程度の人が考えているか。これらについて、アンケート調査を実施し、その結果を分析・考察する。

2. 調査概要

インターネット上にアンケートページを作成し、アンケート調査を実施した。アンケートページへはソーシャルネットワーキングサイト「mixi」、「桶川子育てと教育を語る会」ホームページ、twitter 他、数箇所からリンクし、回答者の幅を広げた。また、携帯電話からの回答も可能にし、二重回答（今回は同じ端末からの回答を二重回答と認識する）は無効とした。

調査項目は「性別」、「年齢（～10才/11才～20才/21才～30才/31才～40才/41才～50才/50才～から一つを選択）」、「どれがアウシュヴィッツで行われていたものだと思いますか。（以後 Q1）（1. 過酷な労働 / 2. 人体実験 / 3. ガス殺 / 4. 銃殺 / 5. 絞首 / 6. 毒殺 / 7. 安楽死 / 8. 十分な栄養を与えない / 9. 衛生管理の放棄から複数選択）」、「Q1 で回答したようなことを自分でやれると思いますか。（以後 Q2）（やれる/やれない から選択）」、「日本でアウシュヴィッツのような出来事が起こると思いますか。（以後 Q3）（思う/思わない から選択）」。

アンケート回答者は日本国内職種不問の全年代の男女計 231 名（男性 101 名、女性 130 名）。10 歳未満から 50 歳以上にわたる広い年齢層からの回答を得た。

なお質問項目のアウシュヴィッツで行われていたことについてはティル・バステアン（1995）、ヴィクトール・E・フランクル（2002）、グイド・クノップ（2001）、トラウデル・ユンゲ（2004）をもとにした。

3. 本研究の意義

本研究の先行研究として、ミルグラム実験があげられる。ミルグラム実験の概要についてはローレン・スレイター（2005）を参照した。ミルグラム実験は、「アイヒマンとその他虐殺に加わった人達は、単に上の指示に従っただけなのかどうか」という質問に答えるために行われた実験である。ナチス・ドイツのユダヤ人虐殺の責任者であるアドルフ・アイヒマンの裁判の翌年である 1961 年に行われたアメリカ・イエール大学心理学専攻の学生への実験によって、閉鎖的な環境下における、権威者の指示に従う人間の心理状況を調査したものである。この実験結果予想アンケートでは、全員が「最悪の状況になるまで指示に従うものはごくわずかだろう」と回答したが、結果としては、62.5%の被験者が最悪の状況まで指示に従ったのである。このことから、ドイツ軍兵士が特別に嗜虐的あるいは狂気的な人間ではなかったことが証明され、条件が整えば誰でも残虐行為を行う可能性があることが示唆された。

「残虐行為はどのような人が行うのか」という問いに関して、ミルグラム実験では「ど

のような人でも行う可能性がある」と示された。しかし、本研究では、アウシュヴィッツでの出来事に関して、さらに調査するとともに、それらを自分がやれると思うかという問いを重ねることにより、自分自身が行為の主体になる可能性を回答者に示そうとした。さらにアウシュヴィッツでの出来事と 731 部隊の事件について照合し、その共通性についても言及した。アウシュヴィッツでの出来事と 731 部隊の事件については、青木富美子（2007）、上坂冬子（1982）を参照した。

また本研究の調査では、匿名性の高いインターネット上にアンケートを設置することにより、職業・学歴を問わず幅広い年代の人からの回答を得ることができた。インターネットの普及とともに、その匿名性にたいして、しばしば問題が指摘されることが多いが、インターネットによる情報収集の有効性を示す調査となった。

4. 調査結果

回答者 231 名中、男性 101 名、女性 130 名。回答者の年齢層割合については図 1 参照。

回答者情報割合	人数	※	10	11~20	21~30	31~40	41~50	51~
全体	100%		5%	29%	32%	16%	15%	2%
男性	44%		2%	36%	29%	12%	20%	2%
女性	56%		8%	24%	35%	19%	12%	2%

↑ ※より右の数値は、それぞれの値(全体、男性、女性)を100%とする

(図 1 : 回答者情報詳細)

Q1「どれがアウシュヴィッツで行われていたものだと思いますか」という設問では、日本におけるアウシュヴィッツでの出来事に対する認知度について調べるため、確実に行われていたとされる行為 9 項目から、「行われていたと思うもの」を選択させた。

選択する 9 項目の行為については 2010 年時点で、行われていたことが確実に判断されたものであるため、あえて言えばこの 9 項目すべてを選択して「正解」となる。Q1 の回答率は以下の通りである (図 2 参照)。

Q1回答	計
1 過酷な労働	201 (87%)
2 人体実験	111 (48%)
3 ガス殺	211 (91%)
4 銃殺	181 (78%)
5 絞首	102 (44%)
6 毒殺	156 (68%)
7 安楽死	60 (26%)
8 十分な食事を与えない	218 (94%)
9 衛生管理の放棄	217 (94%)

(図 2 : Q1 回答率)

Q1 に対する回答では、回答の多かったもの (回答率 60%以上) は「過酷な労働 (87%)」、「ガス殺 (91%)」、「銃殺 (78%)」、「毒殺 (68%)」、「十分な食事を与えない (94%)」、「衛生管理の放棄 (94%)」である。これらの行為は書籍やドキュメンタリー映像、映画でも多く見られる行為であり、ホロコーストの代名詞的な残虐行為として知られている。

また、回答の少なかったもの (回答率 60%未満) は、「人体実験 (48%)」、「絞首 (44%)」、

「安楽死 (26%)」であった。

Q2「Q1 で回答したようなことを自分でやれると思いますか」については、「やれない」という回答がほとんどであった (図3参照)。

Q2回答率	男性	女性	全体
やれる	8%	6%	7%
やれない	92%	94%	93%

(図3 : Q2 回答率)

また Q2 の回答について、回答者は、「こんなことが出来るはずがない」、「日本人では無理だと思う」など、そのように理由を述べている。

同時に、Q3「日本でアウシュヴィッツのような出来事が起こると思いますか？」のという設問に対しても、「思わない」という回答が全体の7割を占めた (図4参照)。

Q3 回答率	男性	女性	全体
思う	27%	32%	30%
思わない	73%	68%	70%

(図4 : Q3 回答率)

Q3 の回答について、回答者のうち「思わない」と回答した人間の多くが、「思わない、というよりも思いたくない」という理由で「思わない」を選択している。

前述の通り、Q1 では項目のすべてを選択してはじめて「正解」となる。アンケートの結果を見ると、回答者 231 人中、すべての項目を選択したのは 52 名、全体の 22% だけだった。このことから、日本国内におけるアウシュヴィッツ——あるいはホロコーストへの関心や認知度の低さがうかがえる。

Q1 の回答において認知度の低かった項目は、先にあげた認知度の高い項目に比べれば映像資料が少ないが、絞首は現代日本の死刑に用いられる手法であり、安楽死については現在も尊厳死問題として争われている事象である。人体実験についても、日本にも事例があったこと (第 731 部隊、九州大学生体解剖事件など) であり、その日本の事例に関する書籍が刊行され、今でも資料 (書類) も発見されている。

また、それらの行為に対して「こんなことが出来るはずがない」「日本人には無理だと思う」などの理由で Q2 の回答を「やれない」にしている回答者の動向から、これはアウシュヴィッツ、ひいてはホロコーストで行われた行為について、少なくとも回答者は「自分達とは違う特殊な人間がやった」という感覚を持っているのではないかという推測をすることが可能である。

Q3 の「思わない」という回答の理由としてあげられた、「思わない、というよりも思いたくない」という回答者の声に、提示された可能性を忌避する意識を見てとることが出来る。

5. 結論

日本におけるアウシュヴィッツでの残虐行為の認知度は、その行為によってかなり違いがある。そして、実は日本でもかつて行われていたり、今でも行われている行為など、言ってみれば「身近」な項目ほど認知度が低かった。また、アウシュヴィッツで行われていた残虐行為について、それを自分が行う可能性があることへの認識は、非常に低いものであった。さらに、日本でアウシュヴィッツのような出来事が起こるかどうかなという問いに対しても、その可能性を否定する回答が多かった。

以上3つの質問への回答から、日本に住む人の意識として、こうした多くの残虐行為はあくまでも「自分たちとは違う」特殊な人間 (性癖、嗜好など) が行うものであり、自分たちでは行い得ない、あるいは行うことなどないとする傾向が見られる。他方、ミルグラム実験では、アウシュヴィッツで行われたような残虐行為は条件が整えば誰にでも行う可能性があることが、すでに証明されており、こうした「自分たちとは違う人間がやった」

と思おうとする傾向は、「自分たちとは違う世界（社会）の出来事である」とすることによって、示された可能性を忌避・否定しようとする意識だと言える。

この研究の結果から、自分自身が残虐行為を行う可能性の自覚を行うとともに、暴力を振るわない主体として自分を確立するには何をしたらよいのか、そのための方策の探究をすすめることを、今後の課題とする。

参考

- 鶴見 尚広、遅塚 忠弼編著，2006『世界史 B』実教出版社
本間 精一，1998『ポーランド未だ滅びず』東洋出版
ティル・バスティアン，1995『アウシュヴィッツとくアウシュヴィッツの嘘』白水社
ヴィクトール・E・フランクル，2002『夜と霧』みすず書房
青木 富美子，2005『731—石井四郎と最近舞台の闇を暴く』新潮社
上坂 冬子，1982『生体解剖 九州大学医学部事件』中央公論社
グイド・クノップ，2001『ヒトラーの共犯者 上・下』原書房
トラウデル・ユンゲ，2004『私はヒトラーの秘書官だった』草思社
中谷 剛，2007『ホロコーストを次世代に伝える』岩波書店
ローレン・スレイター，2005『心は実験できるか：20 世紀心理学実験物語』紀伊國屋書店

桶川子育てと教育を語る会 <http://child-education.hp.infoseek.co.jp/>